

発行
北海道ポーランド文化協会
〒001-0032
札幌市北区北 32 条
西 5 丁目 2-32-902
佐光方
電話・FAX
011-790-8610

POLE

第 80 号 2013. 9. 30
北海道ポーランド文化協会会誌

まもなく
新年度スタート
新会員・スタッフ
募集中!



国際交流～ポーランド人によるパフォーマンスも

日時 2013 年 11 月 8 日(金) 18:00～ 総会 / 19:00～ 懇親会(参加費 3,000 円)

会場 北大クラーク会館 3F 国際文化交流活動室(札幌市北区北 8 西 7)

お問い合わせ 事務局・佐光まで(Tel.011-790-8610)

- ※ 同封ハガキに参加人数を記入し、ご投函ください。
- ※ 懇親会では、お子様を含めご家族、ご友人の参加を歓迎します。お誘い合わせのうえお越しください。
- ※ 会場内では「年会費の納入」もできます。



(写真上段) <第 25 回>定期総会&懇親会風景 (2011.10.21)
(下段) <第 26 回>定期総会&「創立 25 周年記念祝賀会」コザチェフスキ駐日大使(右から 8 人目)(2012.11.3)
写真提供＝尾形芳秀さん

ポーランドの アイヌ研究者 ピウスツキの仕事

—白老における記念碑除幕に寄せて—



ブロニスワフ・ピウスツキの記念碑が 白老のアイヌ民族博物館で除幕

井上 紘一

ポーランド共和国文化・国民遺産省はこのほど、ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)のブロンズ胸像を白老のアイヌ民族博物館へ寄贈します。彼の最初の記念碑は1991年11月2日にユジノ・サハリンスクのサハリン州郷土誌博物館に建立されており、白老の記念碑は世界で二番目の壮挙です。贈呈・除幕式は、来る10月19日に白老のアイヌ民族博物館で、ポーランドのB.ズドロイエフスキ文化・国民遺産相やC.コザチェフスキ駐日ポーランド大使らが列席して挙行され、ピウスツキ家からも三人の「孫」(ブロニスワフの孫でピウスツキ家嫡嗣の木村和保氏、実弟ユゼフの孫でユゼフ・ピウスツキ博物館長のクシシュトフ・ヤラチェフスキ氏、末妹ルドヴィカの孫でブロニスワフの伝記研究にも携わる作家のヴィトルト・コヴァルスキ氏)が出席する予定です。

翌20日には北大の学术交流会館で、市民を対象とする記念セミナーが開催されますので、関心を共有される皆さまは奮ってご参加ください。

ブロニスワフ・ピウスツキは、ロシア帝国に併合されていたリトワニアでポーランド貴族の家系に生まれた卓越する文化人類学者です。サンクト・ペテルブルグ帝大法科一年生だった1887年、ロシア皇帝暗殺未遂事件に連座してサハリン島へ流刑となり、19年をロシア領極東で過ごしました。その間、北東アジア原住民研究に従事し、この分野では先駆的な研究成果を残しましたが、1906年のヨーロッパ帰還後も不遇で、膨大な成果の整理・公刊を果たすことなく、第一次世界大戦下のパリで客死します。年子の実弟ユゼフ(後のポーランド共和国初代元帥、国家首席)が亡国ポーランドを再興する半年前のことでした。

ピウスツキ没後ほぼ1世紀が経過し、特に1970年代以降は、彼の生涯や仕事の掘り起こし作業がポーランド、ロシア、日本などで進められ、ピウスツキは今や北東アジア原住民研究の魁(さきがけ)として、揺るぎない地位を占めています。

彼の仕事では、1912年に刊行された著書『アイ

ヌの言語・フォークロア研究資料』(クラクフ)が名著として名高く、アイヌのほかにニヴフ(ギリヤーク)、ウイльта(オロッコ)、ウリチ(オルチャ)、ナーナイ(ゴリド)の言語・フォークロア研究にも、当時の最新機器の蠟管蓄音機やカメラを駆使して携わり、先駆的成果を残しています。これら既刊・未刊の研究業績は、1998年から刊行がはじまったA.F.マイエヴィチ編『ブロニスワフ・ピウスツキ著作集』(全5巻、4巻まで既刊)にすべて収録される予定です。

ピウスツキの学術遺産に新たな光が当てられるきっかけは、1979年春の札幌におけるCRAP(ピウスツキ業績復元評価委員会。のちにICRAP)の発足でした。ICRAPは、ポーランドで発見されたピウスツキ採録の録音蠟管を日本へ借り出し、最先端の科学技術を駆使して音声再生作業を進めるとともに、散逸した研究業績を博搜して然るべく評価し、彼の伝記資料も収集しました。

その成果は1985年に札幌で行われた第1回ピウスツキ国際シンポジウムで報告されました。その後1991年には第2回シンポジウムがサハリンのユジノ・サハリンスク、第3回は1999年にポーランドのクラクフ、ザコパネと、いずれもピウスツキ縁(ゆかり)の地で開催されました。2010年には澤田和彦・井上紘一編『ブロニスワフ・ピウスツキ評伝』(全2巻、埼玉大学教養学部刊)が上梓されました。

日本はブロニスワフ・ピウスツキと浅からぬ縁で結ばれています。彼は1902-1906年にかけて4度訪日しました。特に1903年の第2回来日は北海道に3ヵ月、1906年の第4回では東京と長崎を中心に7ヵ月半と、かなり長く滞在しました。

北海道では、ポーランド人シェロシェフスキの北海道アイヌ調査に専門家として参加し、函館と白老に各1ヵ月、平取に1週間余り、札幌に数日間滞在しました。とりわけ白老ではアイヌ・コタンに住みつき、コタンの人たちと胸襟を開いて付き合ったことが知られています。

ヨーロッパへ戻る途上の第4回来日では、政治家・文学者・アイヌ研究者・社会主義者・女権活動

家・女流音楽家など多士済々の日本人のみならず、亡命ロシア人や中国人革命家とも交際を重ねた事実もわかっています。なかでも二葉亭四迷との厚い友情は特筆に値します。ピウスツキのアイヌ研究処女作「樺太アイヌの状態」は、東京の京華日報社が発行する月刊誌(『世界』26、27号、1906)に日本語訳で発表されています。

ブロニスワフ・ピウスツキは1903年9月、南樺太東海岸のアイ・コタンでアイヌ女性チュフサンマと結婚し、助造・キヨの二児をもうけました。彼のヨーロッパ帰還後も、妻子は樺太に留まりました。遺児は太平洋戦争後に北海道へ移住し、兄は富良野町、妹は大樹町で一家を構えました。今は孫や曾孫の世代ですが、ブロニスワフの末裔は全員が日本人として日本に住んでいます。因みに、長男助造の長男である木村和保氏は、当代ピウスツキ家の正統な当主ですが、1999年のポーランド初訪問を機に、ユゼフの孫娘一家と

は家族ぐるみで往来を重ねています。

今般のピウスツキ顕彰事業の発端は、ポーランド大使館が着想されたピウスツキ記念碑の寄贈計画でした。2010年8月には当時のヤドヴィガ・ロドヴィッチ大使の発案で記念碑寄贈と学術集会を推進する実行委員会が発足しました。実行委員各位には「縁の下の力持ち」を務めていただきましたが、この場を借りて厚く御礼申し上げます。顕彰事業の実現に至る3年間には、多方面の方々からご支援・ご鞭撻をいただきました。とりわけ事業資金の提供を賜るポーランドの文化・国民遺産省、ポーランド大使館、ポーランド広報文化センター、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」、そして記念セミナーを主催して下さる北海道ポーランド文化協会と北大スラブ研究センターには、特段の深謝をここに銘記する次第です。

(いのうえ・こういち、2013年9月20日記)

記念「国際セミナー」へのお誘い

日時 2013年10月20日(日) 9時～17時

会場 北海道大学学術交流会館 2F 講堂(札幌市北区北8西5)

挨拶 ツィリル・コザチェフスキ(駐日ポーランド大使)
クシシュトフ・ヤラチェフスキ(ユゼフ・ピウスツキ博物館長、ユゼフ・ピウスツキの孫)
木村和保(ピウスツキの孫)

第1部 講演 9:30-13:00 (日本語通訳付き)

E.パワシュェルトコフスカ ◆ ブロニスワフ・ピウスツキのポーランドと日本
(ワルシャワ大学教授)

W.コヴァルスキ ◆ 地球人の魁 ブロニスワフ・ピウスツキとは何者だったのか
(文筆家、ピウスツキの妹の孫)

A.F.マイェヴィチ ◆ なぜだろうか: 白老でブロニスワフ・ピウスツキの記念碑が除幕されるわけ
(アダム・ミツキェヴィチ大学教授、コペルニクス大学教授)

第2部 合同セミナー 14:00-17:00 (日本語)

井上紘一(北海道大学名誉教授) ◆ 「ブロニスワフ・ピウスツキ年譜」より

朝倉利光(北海道大学名誉教授、前北海学園大学長) ◆ 古蠟管レコード資料からの音声再生

村崎恭子(元北海道大学言語文化学部教授) ◆ 樺太アイヌ語研究における B. ピウスツキ蠟管再生の功績

山岸 嵩(前日本工業大学教授、元NHKチーフディレクター) ◆ よみがえったモノとコト、よみがえらせた物と者

※ 記念碑除幕式(10/19 アイヌ民族博物館・白老)については佐光までお問い合わせください。

主催 北海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター

共催 グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」

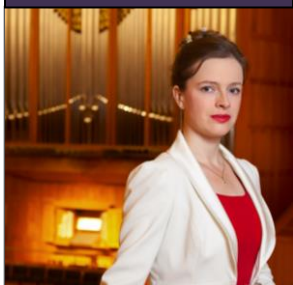
協力 駐日ポーランド大使館、ポーランド広報文化センター

お問い合わせ先 Tel: 011-790-8610 e-mail: ssamitsu@hotmail.com(佐光)





第67回 例会報告

第15代 Kitara
専属オルガニスト

～オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽～

マリア・マグダレナ・カチョル
オルガンリサイタル

with 松井亜樹

2013年8月16日に北海道大学クラーク会館講堂で、本会と北海道大学パイプオルガン研究会、日本アレンスキー協会が協力して、札幌コンサートホール Kitara 第15代専属オルガニスト、マリア・マグダレナ・カチョルさん（ポーランド出身）と声楽家の松井亜樹さん（札幌大谷大学短期大学部）を迎えて、講演と演奏会「オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽」を催し、400人近くの聴衆がすばらしい演奏と50年近い歴史をもつクラーク会館パイプオルガンの美しい響きを堪能しました。

マリア・マグダレナ・カチョルさんの音楽

日本アレンスキー協会会長 川染 雅嗣

8月17日に函館本線は脱線事故が起こり不通になった。その惨状をテレビで観て戦慄した。もし私の札幌行が一日遅れていたら、カチョルさんの演奏を一生聴けなかったかもしれない。そう思うと、偶然とはいえそこには見えない力が働いているに違いないと思わざるを得ない。

8月13日に函館入りした私は、キャンプディレクターを務めているイカール国際ミュージックキャンプで子供たちに室内楽を指導し、16日の朝の特急で札幌に移動した。函館のキャンプは今年で3回目だが、こんなに湿っぽく暑い函館は初めてであった。札幌も似たような気候で、東京とさほど変わらないくらいである。会場のクラーク会館まで歩いて行く間に、汗だくになってしまった。

クラーク会館にはいささか思い出がある。札幌北高に通っていた私は、昼休みに自転車を飛ばしてクラーク会館まで行き、ご飯を食べて午後の授業に間に合うように帰ってくるというバカな遊びに熱中していたときがある。何度か試したがかなりの強行軍である。その時の思い出として残っているのは、クラーク会館の料理がひどく不味かったということくらいである。ましてやそこにパイプオルガンがあることは、今回の企画で初めて知ったくらいである。

当日会場は多くの聴衆で埋め尽くされ、正直札幌の音楽ファンの見識の高さに驚いた。普段日本アレンスキー協会のイベントでの観客動員に苦労していることを思うと、一体どんな人たちが聴きにきたのかと不思議な気持ちになった。

この日の会は前半が講演、後半が演奏である。やがて長身のポーランド美女が登場した。彼女がその日の主演のマリア・マグダレナ・カチョルさんである。

ポーランドのオルガン音楽についての説明がひとしき



り終ると、演奏に入った。バッハのトッカータとフーガニ短調で始まった演奏は、様々な時代の作品を網羅した大変興味深いものであった。カチョルさんの演奏はまさしく正統的なもので、無駄な虚飾を一切排除した、極めて簡潔かつ十分な彼女そのものでもいべき清廉なものだった。大向こうの受けを狙った軽佻浮薄な演奏が蔓延する現代にあって、彼女の音楽は貴重な存在である。

終演後はカチョルさんを囲んで食事会があり、共催団体の代表として私も出席させていただいた。それのみならず、10年ほど使っていなかったポーランド語で乾杯のご挨拶までさせて貰い、その錆びついたポーランド語に我ながら愕然としたものである。話題は多方面に及び、しばらくぶりで知的な時間を過ごすことができた。Kitaraのオルガニストの任期は1年ということだが、それはいかにも短いと言わざるを得ない。日本での生活に慣れたころには交代である。今回最も心残りなのは、彼女の演奏を一度もKitaraで聴いたことがないことである。ポーランドに帰国してからも度々日本を訪れ、演奏して欲しい。その時は是非共Kitaraで聴いてみたいものである。



食事会風景。筆者（左端）とカチヨルさん（右から2人目）

最後に余談だが、ショパンは少年時代に、ワルシャワの教会でオルガンを弾いていたと伝えられている。ショパンのあの徹底したレガート奏法とそれを支える複雑な指使いは、実はこのオルガン演奏の体験から生まれたものではないとも言われる。真偽のほどは確かではないが、十分に考えられることである。



終了後の交流会風景。筆者（後列右から4人目）、カチヨルさん（同6人目）、フルート・立花雅和さん（前列左から1人目）、ソプラノ・松井亜樹さん（同2人目）、全面的にサポートした佐光事務局長（同3人目）

そんなことをふと思い出した。

カチヨルさんの益々の活躍を切に祈念し、この文章を締めくりたい。
(かわそめ・まさし)

ポーランドにおけるオルガン音楽

お話 マリア・マグダレナ・カチヨル

ポーランド音楽の歴史

ポーランドは、966年にキリスト教を国教として以来、今日までローマ教会の影響下にあり、音楽の分野でも西ヨーロッパ文化の影響は多大でした。ポーランドの中世の音楽作品は、16～17世紀に頻発したモルドヴァ、ロシア、スウェーデンなどとの戦争や軍事衝突の中で大部分が失われました。

現存の最古のオルガンとリュートのタブラチュア譜（五線譜だけでなくアルファベットなどを利用した記譜システム）から、ポーランドで活躍した作曲家が優秀な技術を持ち、ヨーロッパ音楽の影響下にあったことがわかります。その中にはクラクフのミコワイ、シャモトゥウィのヴァツワフ、少し後代のアダム・ヤジェンプスキ、マルチン・ミェルチェフスキ（別名ミコワイ・ジェレンスキ）などがいます。15世紀半ばから、楽器や楽譜などを収集し利用する修道院付属機関のおかげで音楽は著しく発展しました。その後ワルシャワでは、1625年に初めてオペラが制作され、1766年にはポーランド最初の劇場が創立されました。

音楽の発展に寄与し世界的に名を残した優れた音楽家としては、モーツァルトが「アンダンテ」K.470を捧げたことでも知られるクラクフのヴァヴェル城大聖堂のバイオリン奏者フェリックス・ヤニエヴィチ、ワルシャワ音楽院を設立しフレデリック・ショパンの最初の師でもあったユゼフ・エルスネル、『音楽週報』誌を発行した作曲家カール・クルピンスキ、政治家であり音楽家でありポーランド国歌の作曲者に擬せられた

ミハウ・クレオファス・オギンスキや、ポーランド・オペラの創始者スタニスワフ・モニューシュコ、独立回復後のポーランドで首相と外務大臣を務めた作曲家イグナツィ・ヤン・パデレフスキ（ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で初めて上演されたポーランド・オペラの作者）などが挙げられます。ポーランド民謡の魅力が作品の中で利用した作曲家には、カール・シマノフスキやフェリクス・ノヴォヴィエイスキがいます。20世紀後半のポーランド音楽は、ヴィトルト・ルトスワフスキ、クシシュトフ・ペンデレツキ、ヘンリク・グレッツキなど世界的に有名な作曲家の強い影響の下にあり、彼らも作品でポーランド民謡を何度も利用しています。

ポーランドのオルガン

ポーランドに存在したオルガンに関する最初の記述はカジミェシュ2世の治世（1177-94）にさかのぼり、彼の宮廷には小さなパイプオルガンがあったそうです。中世には、修道院での儀式のために小さなオルガンが製作されました。たとえばサンドミェシュのドミニコ会のオルガンや、チシェブニツァのシトー会には1200年ごろにはオルガンがあったといわれます。それらの楽器は何度も修理され、それについて多くの情報が集められていて、そこから14世紀以降のオルガン製作者の名を知ることができますが、初期のオルガンは大きな損傷を受け修復されていることが多く、普通は残っている古い楽器のいろいろな痕跡は入念に消し去られています。



15 世紀には、トルン、クラクフ、グダンスク、ヴィリニェス、リュボフなどの大都市には、いくつかの大きなオルガンや、多くの小さなオルガンがあり、それらの都市の経済力を物語っています。残された文書から、オルガンを 2 つもつ聖マリア教会があるクラクフのような都市がいくつもあったことがわかります。ポーランドでもっとも有名なオルガン製作者としてはスタニスワフ・ゼルニク、ミコワイ・ザウエンツキが挙げられます。後者はドイツのフレイブルグの大聖堂をはじめ、ポーランド国外でもオルガンを製作しました。

17 世紀以前の大オルガンは、当時の資料や作品によれば、手鍵盤 2 つとペダル 1 つをそなえ、いわゆるポジティブや 1 つの鍵盤につながったパイプが、現代のように楽器の内部にあるのではなく、聖歌隊席の手すりに吊り下げられていたことが特徴です。裕福な家庭では、「ポジティブ」や「レガール」と呼ばれた、ペダルがなく手鍵盤が 1 つ、音色を変えるためのストップが 1 つ、あるいは数個しかない小さなオルガンが人気がありました。

17 世紀には、ドイツで教育を受けたポーランド人によってオルガン製作工房が発達しました。イェンジェユフやオルクシュでは、彼らの製作したオルガンの完成度の高さに驚かされます。その音色はしばしば後代の影響により変えられています。オルクシュのオルガンは 1612 年製で、ヤン・フンメルが製作したもっとも古い楽器の一つです。オルガンケースはルネサンス様式で、元の状態では 23 のストップと、手鍵盤 2 つとペダルがあり、現在はストップ数は 29 です。

よく知られた価値の高い歴史遺産的オルガンとしては、1620 年にカジミェシュ・ドールヌイで作られた素晴らしい楽器があります。製作予算の不足のためか、トランペットのようないわゆるリード管の音がないという興味深い音色の特徴があります。オルガンボックスはオリジナルのまま、ポーランドと西ヨーロッパで発達した素晴らしい手工業の業がみられます。

ニトロフスキー族の名は、17 世紀のオルガン製作の歴史の中で、もっとも重要でしょう。この時期の現存するもっとも美しいオルガンは、ニトロフスキ家三代のオルガン製作者の手によるものです。特に重要なのはサンドミェシュのコレギウム教会のオルガンで、製作には 1694-98 年まで 4 年かかり、当時のヨーロッパでは最大のおよそ 40 のストップがあります。マッテゾンやアードルングなどのすぐれた音楽理論家も著書でこの楽器に触れています。フロムボルクや



ペルプリンの大聖堂にあるオルガンも、ニトロフスキの残した傑作です。レジャイスクの大聖堂にも、製作に 13 年かかった素晴らしいオルガンがあります。みごとな装飾の施されたバロック様式のオルガンボックスは、ポーランドでもっとも美しいものの一つです。



先にも述べたように、素晴らしいオルガンは、資金の豊富な修道院付属の教会で製作されました。イェンジェユフのシトー会の教会にもそうした素晴らしい例があります。全ヨーロッパでよく知られたオルガン製作者カスパーリーニ家は、プロツワフとプウォツクに素晴らしい楽器をいくつか残しています。有名な、グダンスクのオリヴァのオルガンは、1763-88 年にヤン・ブルフ・オルネットが製作した、現存する中でもっとも大きく繊細な楽器の一つですが、その音色は新しい流行に合わせて何度も変えられています。

中央ヨーロッパの西側に残る楽器の調査から、当時ポーランドで作られたオルガンの様式は、他の国のオルガン製作の強い影響下にあるといえます。オルガンのストップに製作者一族の名がつけられていること以外、ポーランドに固有の特徴は一つもありません。同時期にドイツ、オランダ、フランスで作られたオルガンと比べて、ポーランドのオルガンの大きさは規範から大きく外れません。ポーランドのオルガンは大部分が中程度の大きさで、ストップ数はおよそ 35 ですが、西ヨーロッパでは、オルガンのサイズはもっと大きく、演奏を簡単にするメカニズムやリード管のストップがあります。多くの場合、それはオルガンの注文主の財政力によります。裕福な貴族の家庭では、手鍵盤が 1 つの小さなオルガンが用いられました。同種の楽器が、以前は小さな教会でも使われ、祝日の大きな儀式では「ポジティブオルガン」が用いられました。この種のオルガンで、現存するもっとも美しい楽器はスターリィ・ソソチの大聖堂にあります。

ロマン派の時代には、オルガンの構造や音色に多くの変化がありました。再び武力衝突によって多くの工房が失われ、オルガンは国外の会社で製作されることが多くなりました。その例としては、ウォルカー、ラデガスト、ザウアーや、ポズナンの大聖堂に素晴らしいオルガンを納めたフランスのカヴァイエ・コル社などがあります。残念ながら、このオルガンは第二次世界大戦中に爆撃で完全に破壊されました。

1945 年以降、共産主義体制の下で多くの教会が閉鎖され、オルガン製作は制限され、オルガン音楽の発展は阻害されました。

(佐光伸一 訳)



「幽玄の情景」

選と文＝ヤドヴィガ・ロドヴィッチ (能楽研究家)



ロドヴィッチ前大使
2012.5.29 氏間撮影

— 関寺小町 — 七月

七夕の 織る糸竹の 手向草

まだ夏なのに秋風が吹き、もう秋が来たのかと心が騒ぐ。失ったものはあるけれど、あなたと共に過ごした日々はここに結びつけておきたい。今宵は魔法の七日の夜。月明かりの下、野原で踊ろう。愛の言葉を綴ろう。思い出が和歌という糸に言葉を紡ぐ。

老女の心のなんと美しいことか。この世界のように年を重ねても、いまだ少女のように魅了され、恋をして、風の中を舞っているではないか。けれど、秋風のように、老いの風は吹き始めている。何かを失ったのだ、永遠に。この能を観るとそう感じずにはいられない。

— 氷室 — 八月

深井の氷に閉ぢ付けらるるを 引き放し浮び出でたる氷室の神風 あら寒や 冷やかや

真夏の酷暑の頃、山の中の暗い秘密の場所。森の真ん中に、永遠の水が、静かな氷の岩に姿を変えて。

白い？いえ、残り火のような暗赤色。水を清め、夏の暑さでまいった身体を生き返らせる。陰から二人の神が現れ、冷気を吐く。お喋りをやめて、足を止めて、静かにご覧なさい。丹波の山奥から八百万の神が出てくるかも。

— 三井寺 — 九月

秋も半ばの暮れ待ちて 秋も半ばの暮れ待ちて 月に心や急ぐらん

秋の夜の三井寺は月と強く輝く愛の場所。ああ、懐かしい三井寺。また訪ねて、あの鐘の音を聞かなくては。秋月のように澄んだ鐘の音で満たされたい。

これは永遠の母の愛。正気を失った心は満月のように輝き、大声で我が子を呼ぶ。狂気に生かされる我ら。狂わんばかりに愛さねば。この世から消える前に。



前駐日ポーランド共和国大使
ロドヴィッチ女史による「家庭画報」の連載。
2013年1月～12月号掲載予定です。
「家庭画報」編集部への転載許可をいただきました。
(右から7月号、8月号、9月号の本誌の表紙)



今後の活動予定



<後援事業>

W. ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演と演奏

ポーランド楽派を聴く～ショパンとルトスワフスキ～

日時：10月15日(水) 午後7時 開演

場所：札幌大谷大学百周年記念館同窓会ホール

お話：ズビグニェフ・スコヴロン

(ワルシャワ大学音楽学研究所教授)

※ 詳細は同封の「フライヤー」と「チケット(会員割引)」をご確認ください。



プロニスワフ・ピウスツキ顕彰事業

<記念碑除幕式>

日時：10月19日(土) 時間未定

場所：アイヌ民族博物館(白老郡白老町)



※ 詳細は、事務局・佐光までお問い合わせください。

記念<国際セミナー>

日時：10月20日(日) 午前9時～午後5時

場所：北大学術交流会館 2F (札幌市北区北8西5)

「ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事
-白老における記念碑の除幕に寄せて-

※ 詳細は 2-3 ページをご覧ください。

<第27回>総会と懇親会

日時：11月8日 午後6時(懇親会7時～予定)

場所：北大クラーク会館 3F 国際文化交流活動室

※ 詳細は 1 ページをご覧ください。

会費納入のお願い

2013年10月から新しい年度がスタートします。同封の「会費納入のお願い」をお読みいただき、今後とも当協会へのご理解とご支持をよろしく願います。

【郵便振替口座】専用の用紙を同封しています。
02740-5-19735 北海道ポーランド文化協会

新入会員ご紹介

井上紘一さん、児玉忠征さん
どうぞよろしくお願ひいたします。(事務局)



ポーランド & ニッポン歳時記



秋風をスカートに入れ母海見

(秋風一三秋)

千代磨

アキアジと叫ぶ石狩河口にて

(秋味一三秋)

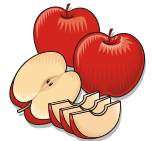
銀芒見てしまったのね奥の院

(芒一三秋)

<岩見沢市在住。霜田千代磨さん>

1992年より作句する。伝統俳句協会会員。現代俳句協会会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

林檎



夏の終わり、そして秋の始まりです。果物を採ったり、冬に備えた瓶詰めを作ったりする時期となりました。今年は去年と違って、豊作ではありません。林檎が熟する前に腐ってしまうそうです。ただもう一つ、私が心配になったのは、熟する前に採られた物、つまり、その後いくら時間が経っても最早熟した果実のようにならない物です。

高校生 熟する前に

もがれた林檎

licealiści
przedwcześnie zerwane
jabłka

<ボズナン市在住。津田モニカさん>

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は4年前から詠みはじめる。

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 80 号 (2013 年 9 月)

目 次

[第 27 回] 総会&懇親会にお越してください！	1
井上紘一「ポーランドのアイヌ研究者ピウスツの仕事—白老における記念碑除幕に寄せて」、 記念「国際セミナー」へのお誘い	2
〈第 67 回例会報告〉オルガンとソプラノでつづるスラブ音楽～マリア・マグダレナ・カチョ ルオルガンリサイタル with 松井亜樹 [2013.8.16]、川染雅嗣「マリア・マグダレナ・カチョ ルさんの音楽」、マリア・マグダレナ・カチョル「ポーランドにおけるオルガン音楽」[講演 要旨]	4
ヤドヴィガ・ロドヴィチ「幽玄の情景 (2)」	7
霜田千代麿・津田モニカ〈ポーランド&ニッポン歳時記〉 / [事務局より] 今後の活動予定： W.ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演&演奏「ポーランド楽派を聴く」ショパンとルト スワフスキ、ブロニスワフ・ピウスツ顕彰事業、[第 27 回]総会と懇親会を企画して [ズビ グニェフ・スコヴロン教授を迎えて～ヴィトルト・ルトスワフスキ生誕 100 周年記念講演 &演奏会]	8